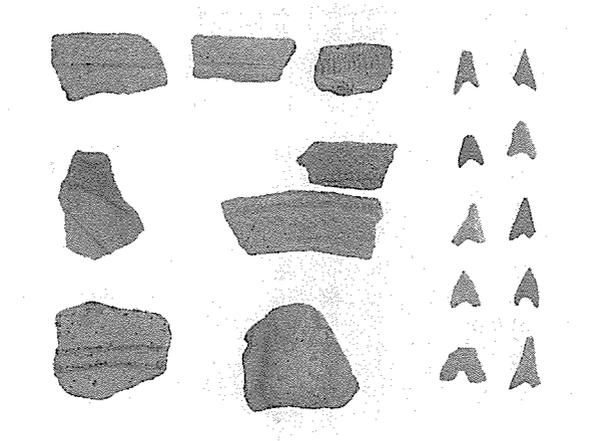


第六章 旧石器・縄文時代



縄文時代の土器片と石鏃（灘区篠原遺跡）

第一節 最古の狩人たち

第二節 縄文人の暮らし

第一節 最古の狩人たち

1 明石原人の発見

更新世と 地球上に人類の遠い祖先がはじめて現われるのは、いまから三〇〇万年前とも二五〇万年前と化石人類 もいわれている。二足で歩行し、解放された手には石器を持っていたらしいが、脳容量は四五

〇立方センチメートル程度でチンパンジーとあまりかわらない。こうした猿人と呼ばれる段階の化石骨は、現段階ではアフリカ大陸で多く発見されているが、今後、他地域で発見される可能性は高い。

いまから約七〇〇五〇万年前に出現する原人と呼ばれる人たちは、アフリカやヨーロッパ・中国大陸・ジャワなどでも発見され、その居住範囲を広く世界各地に広げている。

地質による時代区分でいえば、最も新しい第四紀が人類の時代と呼ばれているが、それ以前の第三紀との境は約二〇〇万年前と推定されているので、最古の人類は第三紀の終りごろにはすでに現われていたことになる。

第四紀更新世は、氷河時代とも呼ばれているように、寒冷な気候で海面の低下する氷期と、やや温暖で海

第一節 最古の狩人たち

表 49 旧石器・縄文時代略年表

旧石器時代		
期	年代	内容
前期	13万年前	リス・ウルク間氷期開始 前期旧石器時代人の活躍 剥片石器の使用
	6～7万年前	明石人の活躍
後期	3万年前	始良火山の噴火 ナイフ形石器の使用盛んになる・兵庫会下山遺跡 有茎尖頭器(投槍)を盛んに使用・下谷上遺跡 大陸と離れて日本列島化
	2万5千年前	
縄文時代		
早期	1万年前	土器の使用、弓矢の出現 押型文土器の使用・境川遺跡
	6千年前	
前期	5千年前	気候温暖化、海面上昇・大歳山遺跡
	4千年前	
後期	4千年前	大規模集落あらわれる 土器の装飾文様発達する
	3千年前	
晩期	3千年前	神戸市域で遺跡増加する 西日本で土器に縄文を施さなくなる 亀ヶ岡系土器の影響および・篠原遺跡

面の上昇する間氷期とが四回くり返され、古い方からギュンツ、ミンデル、リス、ウルクと名付けられている。水期には日本列島周辺では、海面が数十メートルから一〇〇メートルあまりも低下し、大陸とも陸続きになり、陸橋伝いに大形の動物群が移動し、それを追って原人や旧人が現在の日本列島あたりへも移住してきたことが推定される。

第四紀はさらに更新世と完新世に区分されるが、その境界は約一万年ごろだといわれており、以後の時代を日本列島では縄文時代と呼んでいる。

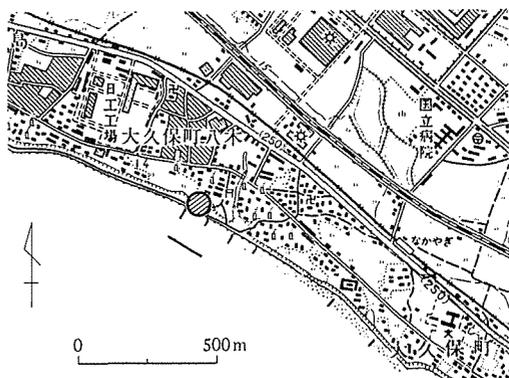


図 113 明石人腰骨発見地

西八木発見の
旧石器#
私たちの祖先が、現在の日本列島にはじめて姿をあらわすのは、いまから十数万年前とも数万年前ともいわれているが、まだ確かなことはわからない。

日本最古の人類の足跡を、神戸市域やその周辺で追い求めるとき、明石市西八木の海岸で直良信夫によって発見された「旧石器」と「化石人骨」は、私たちに多くの問題をなげかけている。

西八木付近の海岸は、屏風ヶ浦とも呼ばれているように、東は林崎、西は東二見にいたる東西約八・五キロメートルにもわたって海蝕崖が続いており、この崖面に顔を出している古い地層から象化石をはじめ多くの動植物化石が発見されることが古くから知られている。

直良信夫によって、明石市西八木発見の旧石器時代人の遺品ではないかと推定される石器とその出土層位が学界で紹介されたのは昭和六年（一九三二）のことである。

当時のわが国の学界では、日本列島においては縄文時代以前の旧石器時代人は住んでいなかったのではないかという意見が支配的であり、直良の報告に対しては反響がほとんどないばかりではなく、むしろ無視されたような状況であったという。しかも、この直良の報告に対して、当時の学界のリーダーであった鳥居龍藏や大山柏がきびしい批判をあげたこともあって、以後全く無視され続けたといってもよい。

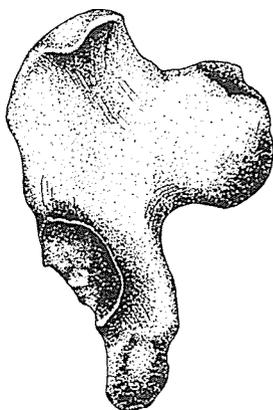


図 114 明石人腰骨

『明石原人』 西八木発見の『旧石器』の報告が印刷されつつあるころ、実はもうひとりの主人公、のちの発見に『明石原人』と呼ばれる化石人骨が、同じ西八木海岸の先に報告された『旧石器』の発見地点の近くから直良によって採集される。

直良信夫は、当時の様子を次のように書き残している。

昭和六年四月十八日、うららかな日、私はいつものように、明石の浜を歩いていて、中八木から西八木を通して、馬田の近くまでくると、新しい崖くずれに出あった。「何かありそうなものだ……」。いつものくせで、土塊の中まで見すかすようなまなざしで、崩れおちている土に目をやった。そのとたん、私の瞳に、異様なものがうつった。「しめた！骨だ！」いそいでその骨の上に積みかさなっていた土塊をはねのけた。それは人骨(骨盤)だった。私は思わず声をたてた。体のふるえが、しばしとまらなかった。(直良信夫『日本の誕生』)

当時ヨーロッパで発見されていた化石人骨のなかに骨盤(腰骨)の発見例がほとんどなく、比較検討できなかったという事情や、本例が学術的な発掘調査によって得られた資料ではなく、崖の崩壊部分から発見された資料であるというような不運も重なって、さらに、なぜか直良自身も正報告を学界に提出することがなかったため学界で承認されることもなく、昭和二十年(一九四五)五月二十五日から二十六日へかけての東京大空襲で

直良の書齋とともに焼失してしまった。

翌朝、空の白むのを待って、焼あとの瓦くずや壁土をはねのけ、夢中になって、人骨をさがしてみた。しかし、ついに、そのあとかたすら探し出すことができなかった。ただ、二個の角岩製の石器だけを、見つけ出すことができたのはせめてもの幸せであった。(『日本の誕生』)

直良自身が『悲運の骨』と呼んだこの化石人骨は、この世に何物をも残さずに消滅したかにみえたが、ふたたびこの世に姿をあらわし、華々しい脚光をあびることになる。

昭和二十三年(一九四八)『人類学雑誌』に掲載された長谷部言人「明石市付近西八木最新世前期堆積出土人類腰骨(石膏型)の原始性に就いて」という論文においてである。

直良が、化石人骨発見当時、東京大学人類学教室に資料を送って教えを請うた松村瞭が、精巧な石膏模型と写真とを残しており、それが長谷部の研究材料となったわけである。

長谷部論文によると、この人骨は壮年男性でやや前かがみで歩く姿が復元できるといい、明石原人(ニッポナントロプス・アカシエンシス)の通称があたえられている。

長谷部は昭和二十三年(一九四八)十月～十一月、「明石西郊含化石層研究特別委員会」を組織し、人骨発見地点近くの崖に沿って一〇メートル×二メートルの試掘坑を設定して発掘調査を行ったが、付近の地層において動物化石が発見される可能性を否定するような結果に終わってしまった。

西八木発見の旧石器の再検討
戦後、相沢忠洋が群馬県岩宿遺跡で関東ローム層のなかから縄文時代以前の打製石器を採集し、昭和二十四年(一九四九)発掘調査によってその事実が確認されて以後、日本列

島に旧石器時代人が住んでいたことを疑う人はいまや皆無である。

その後全国各地で発見された旧石器時代遺跡は、三〇〇〇カ以上にものぼるといふ。

そうしたなかでも、西八木発見の「旧石器」は、「いまわたくしたちがその問題となった石片の写真と実測図とをみても、それらを石器として認めうる根拠にとほしいように思われる」（芹沢長介『先史時代―無土器時代―』）というような評価しか与えられていなかったが、昭和四十四年（一九六九）、ようやく再検討される機会がおとずれる。

その年の五月に開館した神戸市立考古館では、開館記念特別展「瀬戸内一万年展」に、当時問題になりつつあったわが国における旧石器時代前期の遺物と推定されていた大分県早水台遺跡、同県丹生遺跡、栃木県星野遺跡などから発見された石器とともに、戦前の日本で唯一前期旧石器ではないかといわれていた西八木発見の「旧石器」も展示し、さまざまな角度から再検討を試みた。同時に展示した「明石原人」の石膏模型はこの時にはほとんど話題にならなかった。

特別展終了後、西八木発見の「旧石器」を実見した芹沢長介は、その時の観察結果を昭和四十五年「兵庫県西八木出土旧石器の再検討」（『考古学研究』65）として発表し、西八木出土の「旧石器」再検討の糸口をつくった。

芹沢論文によると、直良が焼跡から再発掘した二個の「旧石器」は、いずれも珪岩製で、ジグザグの交互剝離による弧状の刃部をそなえた両刃の礫器（チョッピング・ツール）と片刃の礫器（チョッパー）で、「人類の手になった立派な旧石器と認められうるものである」といふ。

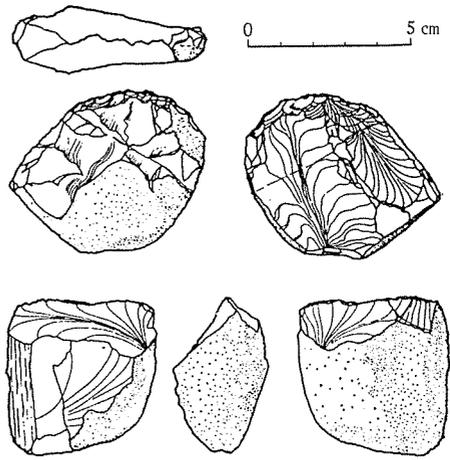


図 115 西八木発見の「旧石器」

この論文によって、西八木発見の石器も前期旧石器としての位置を確実なものとし、「明石原人」に対する評価も一応決着がついたかにみえたが、まだ問題は残されているようである。

日本の更新

日本列島における更新世人類の探究は、長

世人類化石

谷部のあと鈴木尚によって進められ、愛知

県牛川人、静岡県三ヶ日人、同県浜北人などを次々に世に送り出しているが、これらの人類化石に共通する点は、推定身長が低く、矮人の疑いがあるという。

また、沖縄県港川から発見された更新世世人類化石のなかには、腰骨が四例あり、それを比較検討するなかで明石人問題は新たな展開を示している。

昭和五十七年（一九八二）十月の第三六回日本人類学会・日本民族学会連合大会において、遠藤萬里・馬場悠男は、現在入手できるかぎりの古人類骨盤の模型および縄文人・現代畿内人などの骨盤と「明石原人」の骨盤模型とを比較検討した結果、猿人から現代人までの骨盤（腰骨）の進化段階に位置づけると現代人的あるいは超現代人的であるとして、「明石原人」の原人性には疑問があると報告している。

しかも、この研究には伝統的な研究方法に加えて、多次元尺度解析法という最新の統計学的解析法が併用されており、「少なくとも現段階では、適切な学問的検討を加えられた両氏の結論に変更を加えるべきとこ

ろは何もない」(塩原和郎編『日本人の起源』)とまでいいきる賛同者も多い。

しかし西八木発見腰骨超現代人説に対して、『明石人骨』はあくまで化石化した人骨であって、その事実まで否定できないのではないかという直良信夫の長男博人や春成秀爾の鋭い反論もある。

わずかに残されていたわずかな部分(腰骨)をも消滅してしまった『明石原人』は、なお自らの定位置を得ないまま流浪し続ける。

また春成秀爾は、その後「明石人問題」(『旧石器考古学』29)で、この西八木発見の『旧石器』は、自然力によって剥離したものであるという観察結果を公表している。そして、この『旧石器』と「明石人骨が不可分の関係をもって発見されたことは、研究史的経緯としては事実であるが、その存在状況は通常の遺跡あるいは遺構における共存とは性格を異にする」と述べ、石器と人骨は別の問題として論ずべきことを強調している。

西八木での こうして西八木発見の腰骨に対する関心が高まるなかで、昭和六十年(一九八五)三月、春成再発掘調査 秀爾が中心になって西八木海岸の再発掘調査が実施される。

この調査の目的は、『明石原人』の出土地点に近い場所で、人骨が含まれていたと推定される砂礫層を発掘し、そこに含まれている獣骨化石の化石化の状態を『明石原人』の化石化状態と比較検討することであり、剥片石器などの発見もひそかに期待されていた。

調査の結果は、期待された人骨・石器が未発見に終わっただけでなく、一片の獣骨すらも発見されなかったが、思いもかけず木器が発見され、この調査が報道されたことによって、かつてこの発掘地点より約二〇

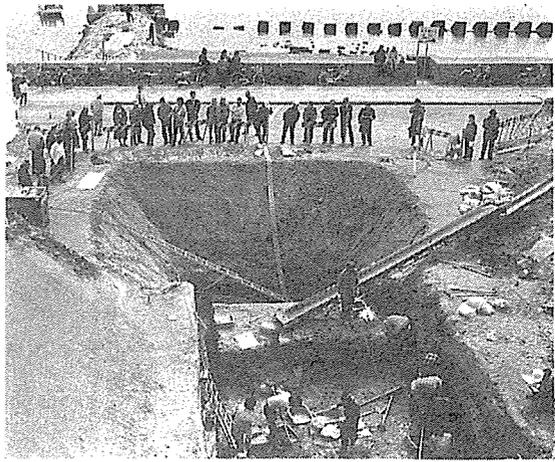


写真 85 西八木海岸再調査現場

メートル西の西八木層下部から採集された剥片石器の存在が明らかになった。

メートル、厚さが七・五〜三・五ミリメートルの一端が尖る板状の加工材である。材質はクワ科の落葉広葉樹であるハリグワで、弾力性に富んでいて折れにくいという。短剣的な用途をもつ刃物であったと推定されている。

また、紀平肇によって西八木層下部から採集された剥片石器は、最近各地で検出されつつある前期旧石器時代後半の石器と類似するものである。

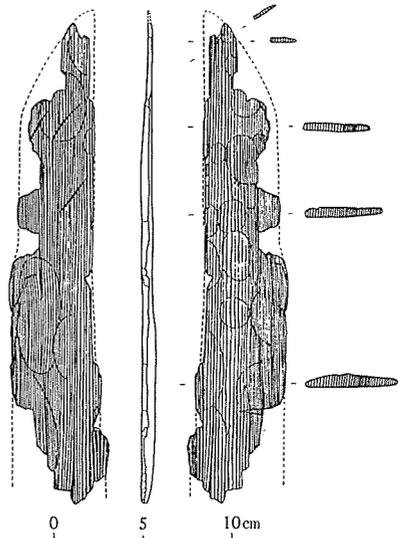


図 116 西八木層下部発見の木器

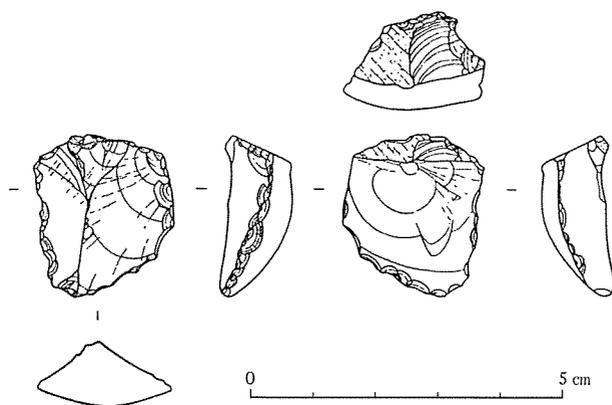


図 117 西八木層下部から採集された剥片石器

そして、かつて「明石原人」が発見され、いままた石器や木器が発見された西八木層下部の砂礫層は、古西八木川の堆積層であり、そこに含まれている遺物は、おそらく四、五キロメートル上流から流されてきて堆積したものであると推定されている。その年代は、最終氷期前葉の寒冷期から温暖期へかけての約六七万年前ごろであろうという。

七万年前ごろであろうという。

今回の調査は、「明石原人」はこれまで推定されていた年代よりもやや新しい六〜七万年前の旧人段階の化石人骨であったろうという推定と、彼らの住んでいたであろう場所が、数キロメートル北方に存在するという可能性を新たに提出した。また、旧石器時代における木器の存在とその重要性を明らかにしたことは、今後の研究の方向を指し示しているという点で重要である。そして、明石人問題の追求はなお多くの研究者によって続けられることであろう。

日本の前・ いまから三万年以上前の日本における旧人段階
中期旧石器 の化石人骨としては明石人や愛知県の牛川人が
おそらくその段階の人類に当たるだろうといわれている。

こうした前・中期旧石器時代にわが国に確実に人類が住んでいたのか、もし住んでいたとすればどのような石器を使用して

いたのか、という問題は長く論争がくりかえされていたが、昭和五十一年（一九七六）以降、宮城県座散乱木遺跡や同県馬場壇A遺跡などで前・中期旧石器と推定される石器包含層が重なっている様子が明らかになってきた。

リス・ウルム間氷期は約一三万年前から八万年前まで続くと推定されているが、宮城県内で発見されつつあるこうした石器のなかには明らかにこの間氷期の段階のものが含まれている。そしてそれ以降のウルム氷期にもひき続いて人類が現在の日本列島付近に住んでいたであろうことはもはや疑う余地のない事実であるということができる。

この時期の石器は剥片を利用してつくられたものが多く後期旧石器時代のナイフ形石器に代表されるような定型化した石器とは著しい違いをみせている。

2 ナイフ形石器の登場

後期旧石器時代のはじまり

いまから三万年以上も前の前・中期旧石器時代に、現在の日本列島に人類が住みついていたことはほぼ確実であるが、まだ神戸市域では確実な資料にめぐまれていない。市域で、

人類の残した資料を確認できるのは、後期旧石器時代のナイフ形石器をもった人々が登場して以後のことである。

そのころの自然環境を復元するための資料は、六甲アイランドで行われたボーリング調査で多くの情報が

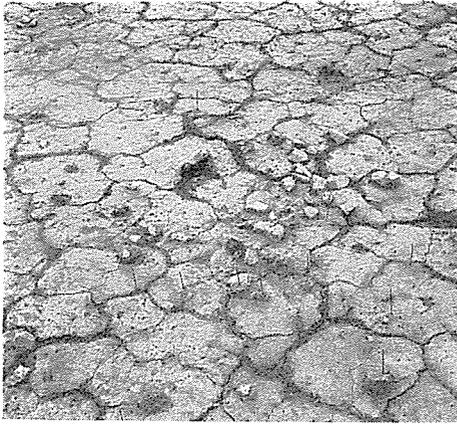


写真 86 氷上郡春日町七日市遺跡の礫群

得られているが、最終氷期には、神戸付近ではそれほど寒冷化せず、最終氷期と呼ぶよりも最終寒冷期と表現するほうがふさわしいような自然環境であったという。森林も温帯北部的な冷温帯林で、海も六甲アイランドやポートアイランドの南端まで浸入していた時期が数回認められるという。

ナイフ形石器をもった人々が登場する直前の五万～四万年前には一時的に寒冷期が訪れるが、三万年前あるいは二万六、七〇〇年前には乾燥した小温暖期が訪れ、この好気候を背景に後期旧石器時代人が登場してくると推定される。

二万五〇〇〇年前に噴出した始良^{あきら}火山灰層は、各地で年代決定のカギ層として大きな意義をもっているが、多紀郡板井遺跡や氷上郡七日市遺跡で、この始良火山灰層より下層からもナイフ形石器が発見されているので、この石器の出現期をある程度限定してとらえることができるようになった。また、この火山灰層の上層からも石器が発見されていて、石器の編年的研究も大きく前進している。

なお、神戸市域では旧石器時代人の狩猟の対象となった哺乳動物についての情報はほとんどないが、二万五〇〇〇～二万年前の日本列島では、ノウマンゾウ、ヤベオオツノジカ、ニホンムカシジカ、ウマ類、ヘラジカ、バイソン（野牛）などの大型哺乳類が生息していたといわれている。



写真 87 ナイフ形石器(兵庫区会下山遺跡)

市内発見のナイフ形石器
 神戸市域では、これまでに旧石器時代遺跡が学術調査された例はなく、調査の際に発見されたものや表面採集によってえられたもので、

たものばかりで、石器の形態によってその年代を推定するほかない。
 神戸市域でナイフ形石器がはじめて発見されたのは、昭和四十五年(一九七〇)のことである。兵庫区会下山遺跡で松田均がサヌカイト製の国府型ナイフを採集したもので、その後明石川流域を中心に各地で発見が続いている。

国府型ナイフと呼ばれる石器は、盤状の石核から連続してはぎとった剥片を利用してつくった規格的なナイフで比較的大形の例が多い。

こうした石器をつくりだすための石核が、西区神出町の拍子ヶ池や同区新方からも発見されているから、神戸市域とその周辺部では、今後この時期の遺跡が増加する可能性は高い。

ナイフ形石器のうちで、やや小形化した例は山田川流域の大蔵山・星陵台、明石川の支流伊川流域の池上・上脇、明石川西岸段丘上の神出町雌岡山・雄岡山周辺の

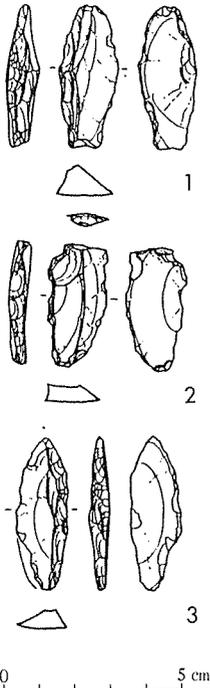


図 118 ナイフ形石器(西区池上南山遺跡)

金棒池・拍子ヶ池・大皿池・笹ヶ池・青池、岩岡町の印籠池、明石川中流の中村などで採集されているが、ナイフ形石器は時代とともに小形化する傾向にあるといわれているので、これらのナイフは会下山例などに比してやや時期が下る可能性がある。

旧石器時

代の終末

一万五〇〇〇年〜一万年前になるとそれ以前の寒冷な気候にかわって気温も上昇し、森林も落葉広葉樹が増加してくるといわれる。

有茎尖頭器と呼ばれている槍先が登場するのは、おそらくこの時期であろう。神戸市域で発見された有茎尖頭器は大小二種類あるが、大形のもののは北区下谷上、灘区滝ノ奥、垂水区名谷などから発見されており、小形のもののは西区青谷、同区金棒池などで発見されている。

下谷上例は現長約一〇センチメートルで先端部は少し欠けている。名谷例も先端が少し欠けているが推定長約八センチメートル、滝ノ奥例も先端が欠けており推定長約九センチメートルである。いずれもサヌカイト製で、表面にきれいな剥離面が並んだ精巧なつくりの石器である。いずれも先端部が欠失しているのは使用による破損かもしれない。

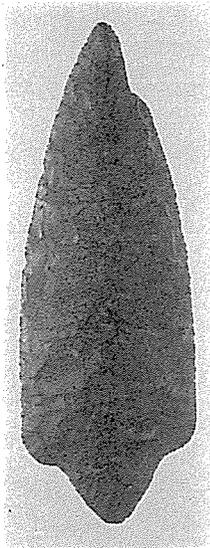


写真 88 有茎尖頭器
(北区下谷上遺跡)

青谷や金棒池の例は、三センチメートル前後の小形で、こうした形態の尖頭器が石鏃に転化してゆくのではないかとされている。

こうした尖頭器と同じ時期に使用されたと推定されている石器に、細石刃と呼ばれている長

さ二〜三センチメートルの小形の石器がある。木や骨の柄の側縁に溝をほり、そこに細かい石器をならべてはめこみ、槍先やナイフをつくりだすものであり、汎世界的に旧石器時代から新石器時代への過渡期に発達したものであるが、神戸市域では、まだ確実な発見例はない。

また、この時期には一部の地域で土器も確実に出現しているが、市内ではまだその例にめぐまれていない。

第二節 縄文人の暮らし

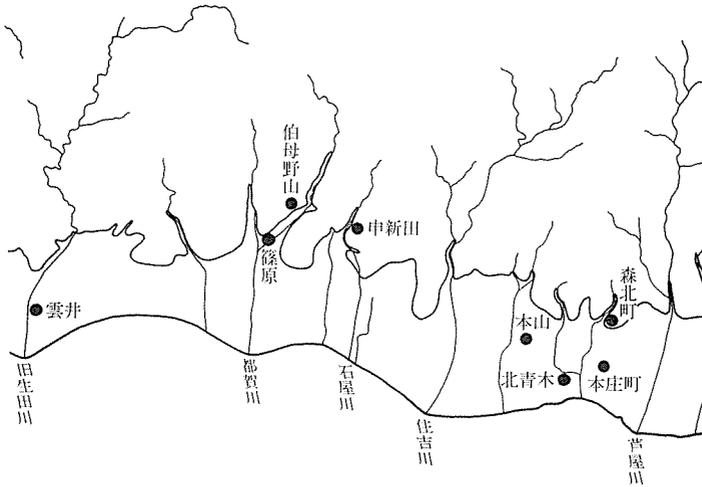
1 弓矢と土器の出現

縄文時代の 今から約一万五〇〇〇～一万年前の日本列島は、最終氷期の寒冷気候から徐々に温暖な気候はじまり へと移行しつつある時期で、この気候の温暖化に伴う海面の上昇は、津軽海峡にあった陸橋

を水没させ、約一万～八〇〇〇年前ごろには対馬海峡も開いて、日本海に暖流が流れ込み、現在の日本列島に近い姿になったといわれている。

この時代の人々のくらしは、採集・狩猟・漁撈を主要な生産手段としている点では、前代の旧石器時代人と変わりは無いが、気候の変化に伴う動物相・植物相の変化に対応するため、新たな生産用具として弓矢や土器を生み出した。わが国における新石器時代Ⅱ縄文時代のはじまりである。

気候の寒冷な氷期に活躍した大型群せい動物に代わって、熊・鹿・イノシシなど比較的小形の哺乳動物や鳥類を狩猟の対象とするために、必然的に弓矢のような狩猟具が発明され、世界的な気候の温暖化に伴って内湾性の地形が出現し、そこに生息する貝類を捕獲するようになると、その大量処理のための道具として土



跡 分 布 図 (六甲山地南麓)

器が発明された。

縄文時代の 縄文時代は、土器の変遷を手がかりに、

時期区分 早期・前期・中期・後期・晩期の五期

に区分されることが多い。その実年代は、早期が今から一万年～六〇〇〇年前、前期が六〇〇〇～五〇〇〇年前、中期が五〇〇〇～四〇〇〇年前、後期が四〇〇〇～三〇〇〇年前、晩期が三〇〇〇～二三〇〇年前ごろに当たるだろうと推定されている。後期旧石器時代の終わりごろから縄文時代始めの土器や石鏃の出現期を、とくに早期と区別して、草創期と呼ぼうという説もあるが、神戸市域やその周辺では、まだこの時期の遺跡は発見されていない。

六甲山地南麓 六甲山地南麓で最も古い縄文時代の

の早期の遺跡 遺跡は、芦屋市山芦屋遺跡・中央区

宇治川南遺跡・須磨区境川遺跡など、押型文土器と呼ばれる土器が発見されている遺跡である。

押型文土器は、山形・楕円・格子目などの文様を彫

第二節 縄文人のくらし

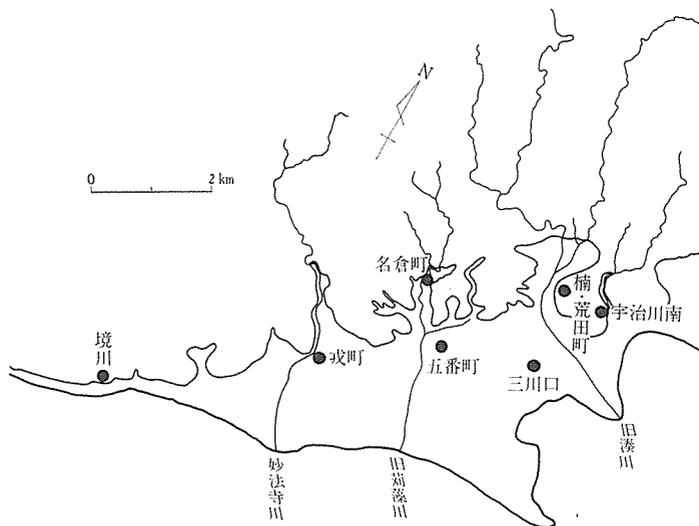


図 119 縄文遺

刻した円棒を土器の表面に押しつけながら回転させて施文した尖底または丸底の深鉢形土器で、回転押型文土器とも呼ばれている。西日本の早期を代表する土器であり、前期はじめまで続く地域もあり、北は北海道から南は九州まで広く分布している。

山芦屋遺跡は、芦屋川とその支流高座川が合流するあたりの北西部、標高約八〇メートルの中位段丘上に位置し、遺跡下部から山形押型文土器が発見され、上部から楕円押型文土器および無文土器が発見されており、近畿地方における押型文土器の変遷を知るうえで重要である。また、この遺跡からは、前期および後期の土器も発見されており、この地域における中心的な集落の一つであったことが知られる。

旧生田川と旧湊川の間、宇治川西岸に位置する中央区宇治川南遺跡では、標高約一〇メートル付近の低位段丘上で、縄文時代早期～晩期にわたる遺物が発見されている。縄文時代の遺物が発見されている土層は

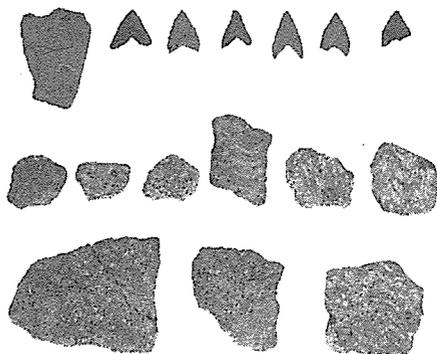


写真 89 境川遺跡発見の押型文土器と石器

三層あり、最も下の層には早期から後期にいたる土器が混じっており、その上層には晩期の滋賀里Ⅱ・Ⅲ a 式土器を中心とする土層があり、さらにその上層には弥生時代前期の土器に混じって、晩期の突帯文土器・後期末の宮滝式土器・中期の船元式土器を含む土層がある。

早期の土器は、わずかに数点しか発見されていないが、楕円文を施した押型文土器であり、これまで西は須磨区の境川遺跡、東は山芦屋遺跡でしか発見されていなかった押型文土器が、中間の地域で発見された意味は大きい。

境川遺跡は、須磨区須磨浦公園内の、後に摂播国境となった境川東岸の標高約三〇メートルあたりの段丘上に位置する、発掘調査は実施されていないが、昭和三十年（一九五五）に異形磨製石器（通称トロトロ石器）を発見し、その後、早期の押型文土器・石鏃・尖頭器などが次々と発見されて、阪神間で最も古い縄文遺跡として知られている。

早期の遺

跡分布

これまでに知られている周辺部の押型文土器発見地をみると、境川以西では、兵庫県神崎郡神堂の前遺跡が最も近い早期の遺跡である。そして山芦屋以東では、生駒山麓の東大阪市神並・山畑両遺跡あたりまで早期の遺跡は未発見であり、当時の人口の希薄さがうかがえる。

縄文時代早期ごろの神戸市域周辺の環境は、六甲アイランドにおける海底堆積物のボーリング調査の成果などによって知ることができるが、この時期の汎地球的な規模での気温上昇によって、落葉樹林のなかには南方系の常緑樹が増加してくるし、海面も以前より高まり、現海面下約二〇メートルあたりまで上昇してきたという。

近畿地方では、これまでに早期の遺跡は約一〇〇〇カ所発見されているが、兵庫県美方郡・城崎郡・養父郡にまたがる中国山地東端部の一群、京都盆地から琵琶湖南部にいたる一群、生駒山西麓の一群、大和高原から名張川流域へかけての一群、鈴鹿山脈東側の一群、そして三重県の宮川・櫛田川中流域の一群というように遺跡の集中する地域と、阪神間のように遺跡の散在する地域とがある。ただし、瀬戸内東部の牛窓・児島あたりでは、島嶼部や海浜部で多くの遺跡が発見されているので、当時の海岸線の位置から推定して、現海面下になお多くの遺跡が眠っている可能性はすくなくない。

2 縄文海進

縄文海進 神戸付近では七〇〇〇年前ごろから世界的な気候の温暖化に伴い、コナラを中心とした落葉樹期の汀線 林から年中落葉しない照葉樹林への森林交代がはじまり、六五〇〇年前ごろには両者の比率は

半々になり、やがて六〇〇〇年前ごろにはアカガン並属が圧倒的に多くなる。以後現在にいたるまでその傾向は続いている。

六〇〇〇年前ごろまで海面の上昇は続き、ついに現在の海面に比して四メートルも高くなる。いわゆる縄文海進期がピークをむかえるわけである。

この縄文時代前期ごろに比定される縄文海進期の汀線は、関東平野では現在の海岸線から実に四五キロメートルも内陸部に入っていることが知られており、付近に当時の貝塚を残していることから実証されている。神戸市域とその周辺部でもこの縄文海進期の汀線は、岩見義男や前田保夫の研究によって明らかのように、数メートルの崖面や扇状地地形の傾斜変化線として、現在も市街地のあちこちにその痕跡をよくとどめている。

たとえば、神戸市域東端の本庄町付近では現海岸線より約九〇〇メートルも北側の国道2号付近まで海が入り込み、住吉川以西の東求女塚付近では古墳の南側で小さな崖をつくっている。この小さな崖は石屋川以西の処女塚付近まで続き、それ以西は国道43号ぞいに脇浜あたりまで比較的大きな崖面をつくっている。

脇浜から新生田川あたりまでは臨海線ぞいに一メートルばかりの崖面をつくり、新生田川以西はJR三ノ宮駅南側あたりまで再び入り込んでいる。JR三ノ宮駅付近からJR元町駅を経て花隈あたりまでも大きな崖面をつくっていて明瞭である。

その西は、神戸駅北側の湊川神社付近から、さらに北側へ入り込み、上沢通に近いところまで湾入している。そして当時の汀線は長田神社の大鳥居付近から蓮池小学校付近を通り、山陽電鉄板宿駅付近にまで達している。

板宿以西は、妙法寺川にそって海浜公園あたりまで急に南下し、同公園西端あたりで現海岸線とほとんど

第二節 縄文人の暮らし



写真 90 大歳山遺跡全景

変わらない位置になり、JR須磨駅付近にまで達している。須磨以西明石川流域までは現海岸線とほとんど変化はないが、山田川下流では大歳山遺跡の南側まで深く海が入り込んでいた

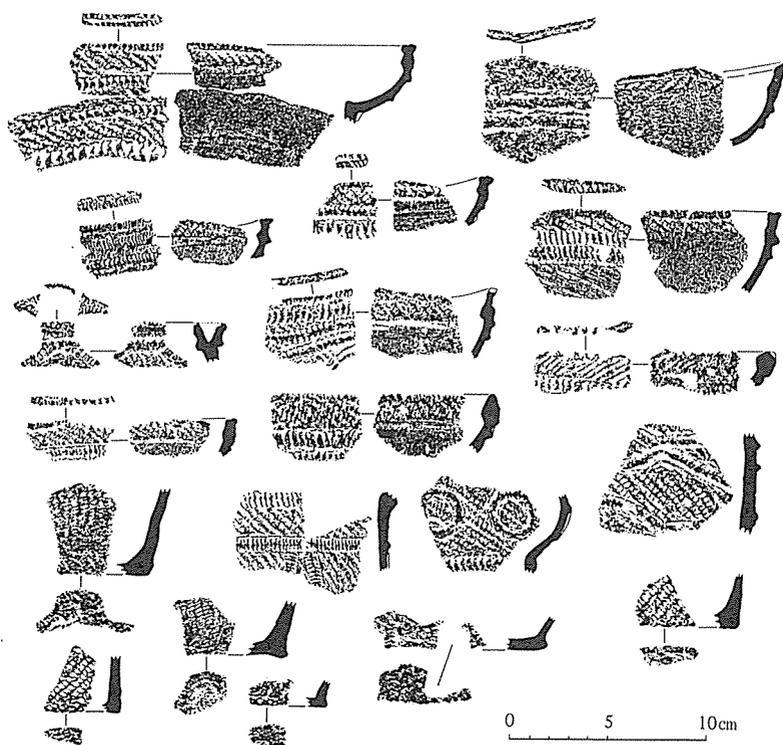


図 120 大歳山式土器

であろう。

明石川流域については、前葉和子らの研究によると、縄文海進期の最も海が入り込んだ時期には、現海岸線から五キロメートル近くも奥の出合橋付近にまで汀線が入り込んでいたと推定されている。

前期の遺跡の分布

前期の遺跡分布をみると、六甲山地南麓の東半部では、芦屋市朝日ヶ丘（標高約五〇メートル）・山芦屋両遺跡のほか灘区申新田（標高約一六〇メートル）で、土器は未発見であるが石鏃や珧状耳飾など前期と推定されている遺物が発見されている。

西半部では、前期の土器が発見された雲井遺跡（標高一二メートル）があげられるほか、山田川流域の大歳山遺跡（標高約三〇メートル）が知られている。

こうした前期の遺跡が比較的高位に立地していることはいうまでもないが、そのほとんどの遺跡が中期にまで継続していないことは、この時期以後、生活環境が著しく変化していったことと深くかかわる事柄であろう。

3 東の土器・西の土器

篠原遺跡

芦屋川以西旧生田川までの地域で大規模な縄文遺跡としては、都賀川の上流六甲川と袖谷川の合流地点付近の標高八五〇メートルあたりまでの扇状地性丘陵上に位置する篠原遺跡がある。昭和四年（一九二九）に小林行雄によって紹介され、その後の市街地造成によって消滅してしまったと推

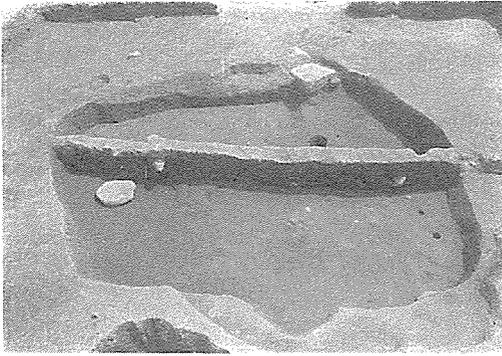


写真 91 縄文時代の竪穴住居（灘区篠原遺跡）

定されていたが、昭和五十八年（一九八三）には付近の再開発工事に伴って、相次いで二カ所で発掘調査が実施され遺跡の様相が一段と明らかになった。

灘区篠原中町七丁目では現地地表下七〇センチメートルまでが弥生時代後期の遺物包含層で、それ以下三・三メートルまでに縄文時代中期～晩期の五層の遺物包含層が発見されている。また遺構としては縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居、土坑、土器溜、礫溜などのほか、自然の河道や谷状の地形も発見されている。

竪穴住居と推定される遺構は、東西約四・二メートル、南北約三・三メートルの不整形で、床面に柱穴かと推定されるピットがある。

この地点から発見された土器は中期末から晩期におよぶが、中期末の北白川C式土器、後期前半の北白川上層I式土器、晩期後葉の船橋式土器など畿内系の土器が目立ち、晩期後葉の船橋式土器に若干の弥生時代前期の土器が混じっていることも注意すべきである。

灘区篠原中町二丁目では、標高約五五メートルの扇状地に立地し、縄文時代晩期中葉（滋賀里式土器）の甕棺九基、集石遺構一カ所があり、遺物としては土器、石棒、石斧、石鏃、石錘、叩石などが発見されている。

発見された土器のなかには、東北地方を中心に分布する晩期の大洞式土器（亀ヶ岡式土器とも呼ばれている）のほか、遮光器型土偶や注口土



写真 92 篠原遺跡甕棺出土状況

器などが含まれており、当時の文化交流の問題を追求する格好の資料を提供してくれている。東北地方のこの時期の土器は、これまで河内平野部あたりまでが分布の西限と推定されていたが、さらに西へその分布範囲を広げたことになり、遮光器型土偶もおそらくその分布の西限にあたるだろう。

そのほか、石棒は未製品を含む十数点が発見されており、製造所址であったことが知られ、この遺跡が周辺遺跡のなかでも中心的な位置を占める集落であったことをうかがわせている。

雲井遺跡

旧生田川の東岸に位置する雲井遺跡は、旧生田川の形
成する扇状地末端近くに位置する遺跡で、前期の屋外

炉四基、後期の集石遺構、晩期から弥生時代前期へかけての竪穴状の落ち込みや柱穴群などが発見されている。

縄文土器のうち前期のものは初頭に位置づけられる羽島下層Ⅱ式土器があり、中期には船元式土器など瀬戸内系の土器が目立ち、後期では北白川上層式土器、晩期には終末期の突帯文土器が発見されている。

宇治川南

旧生田川以西須磨までの地域では、長期にわたる集落として宇治川南遺跡が注目される。

遺跡

この遺跡での早期の押型文土器の発見についてはさきにふれたが、前期の遺物についてはこれまで知られていない。

中期に入ると前葉の船元Ⅰ式土器、中葉の船元Ⅲ式土器、後葉の里木Ⅱ式土器というように瀬戸内地方を中心に広く大阪湾沿岸部に分布する土器が目立つが、なかには東日本風の土器も少量ながらみうけられる。

後期の土器も初頭の中津式土器、それに続く福田Ⅱ式土器、中葉の北白川上層Ⅱ式・Ⅲ式土器、後葉の一乗寺Ⅱ式土器、末葉の宮滝式土器というように、のちの摂津・河内・大和・山城などで一般的な土器のほか東日本(おそらくは東北地方)からもたらされたと推定される土器も若干含まれている。

晩期にも前半の滋賀里Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器、後半の突帯文系の滋賀里Ⅳ式土器、船橋式土器、長原式土器などが出土し、中期以来連続して縄文人の居住地になっていたことが知られる。なお、晩期後半には少量の東日本系の土器を伴い、篠原遺跡よりもさらに西へその分布圏を広げたことを示しているほか河内系の土器や播磨系の土器も目立ち、この時期の文化交流の広さを実証している。

4 縄文時代の集団領域

六甲山地南麓 武庫川から須磨にいたる六甲山地南麓の東西約二八キロメートルの地域に分布する縄文遺跡の遺跡分布 跡は約二〇カ所である。そのなかには土器が未発見で時期の確定しにくい遺跡もあるがおおよそ全期間にわたって遺跡が存する。

最も古い遺跡は早期前半の境川遺跡であり、早期後半には、山芦屋遺跡と宇治川南遺跡が出現する。

早期末から前期にかけては雲井遺跡が出現し、早期から引き続いて遺跡が継続する山芦屋遺跡のほか新

たに朝日ヶ丘遺跡が出現する。

中期の土器の発見されている遺跡は、雲井遺跡・宇治川南遺跡で比較的まとまって発見されているほか、東灘区本庄町遺跡や篠原遺跡・長田区名倉町遺跡(標高約四〇メートル)などで知られている。

後期になると、本庄町遺跡・篠原遺跡・雲井遺跡・宇治川南遺跡で前代以来遺跡が継続するほか、山芦屋遺跡で再び人々が生活をはじめたことが知られる。また、新たに西宮神社境内(標高約三・五メートル)・北青木(標高約三メートル)・楠・荒田町(標高約一五メートル)など比較的低地部に新たな遺跡が出現し、本庄町・雲井・宇治川南の三遺跡では、遺跡立地が安定しているのか晩期まで生活が続いている。

そして晩期には、本庄町・北青木・篠原などで後期から遺跡が継続するほか、森北町(標高約二〇メートル)・本山(標高約八メートル)・三川口(標高約二メートル)・五番町(標高約七メートル)・戎町(標高約一二メートル)など新たな遺跡が出現するが、戎町では晩期の土器と弥生前期の土器を伴う水田址が発見されている。

こうした晩期の集落立地をみると、その多くが縄文海進期の汀線以下の低地に営まれている。こうした晩期の集落立地の低地化は、前期以来引き続いて海退が一段と強まる時期にあたっていることと関連するが、こうした立地が次の農業開始の時代をむかえるための大きな素地となったようである。

明石川流域の

須磨以西の明石川流域では、早期の土器は未発見であるが、金棒池遺跡など早期の可能性遺跡分布をもつ遺跡もあり、須磨の境川遺跡が明石川流域の遺跡群と関連する可能性もある。

前期の遺跡としては、山田川流域の大歳山遺跡が知られているだけであり、中期に入ると、大歳山のほか福田川河口に近い日向遺跡や舞子浜・明石市出ノ上などの遺跡が出現する。

第二節 縄文人の暮らし

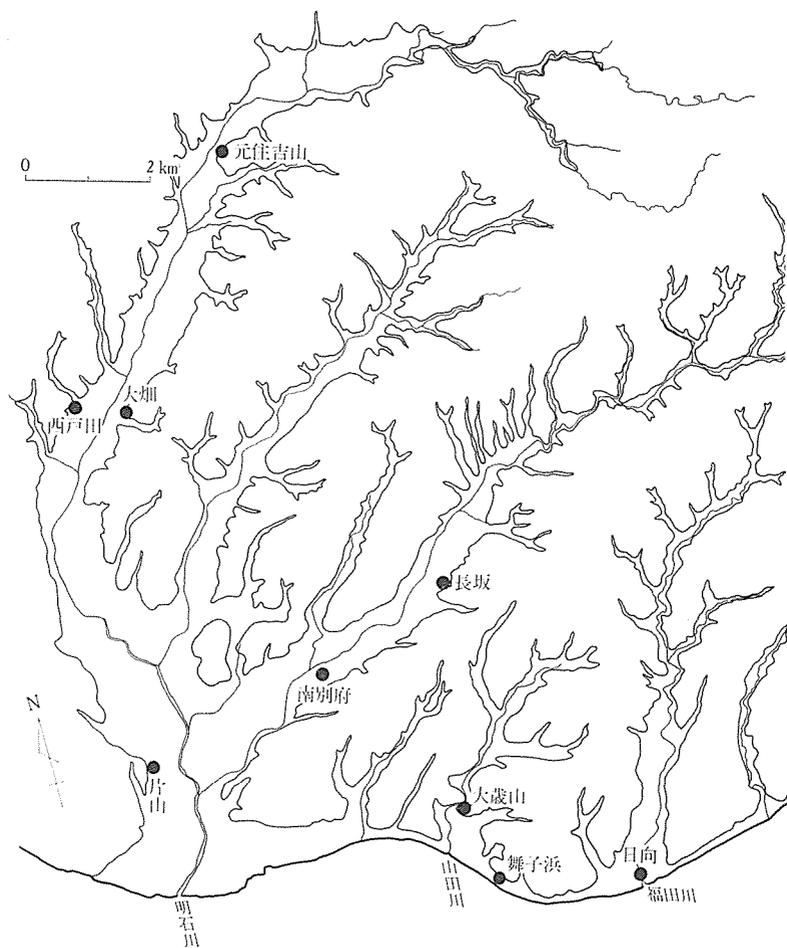


図 121 縄文遺跡分布図（明石川流域）

後期には、日向・出ノ上両遺跡が継続するほか、新たに明石川の支流伊川流域の南別府・長坂両遺跡、明石川下流西岸の玉津町片山・上流の押部谷町元住吉山の両遺跡などが知られている。

また晩期には、日向遺跡で前代以来遺跡が継続するほか、大蔵山や明石川中流の大畑・西戸田両遺跡が現われる。

縄文人の

集団領域

このような遺跡分布をみると、明石川流域では周辺の福田川・山田川両流域をも含めて一つのまとまりをもって遺跡が分布しているようにみえる。しかも、この範囲内で早期から晩期にいたる全期間の遺跡が存在しており、あたかも一集団が移動しながらこの遺跡群を残したのではないかと推定される。

このような傾向は、六甲山地南麓でも同様で、この地域ではおそらく都賀川あたりを境にして東西二群に区分することが可能なのではなからうか。

明石川流域では直径約二〇メートル程度がその範囲であり、六甲山地南麓では、北側を山地で区画されているが須磨から都賀川あたりまでは約一四キロメートル、それ以东武庫川あたりまでは約一四キロメートルである。おそらくこの程度の範囲が縄文時代の一集団が行動する領域＝集団領域であろう。

武庫川中流の北神戸地域については、長尾町宅原遺跡で後期の土器が発見され、道場町塩田遺跡で晩期の土器が発見されているほか、縄文時代の資料はとぼしいが、三田盆地全体では三田市大藪遺跡で早期の遺物が発見されているのをはじめ、近年急速に縄文遺跡数が増加しつつあるので、この地域においても一つの集団領域を設定することが可能であろう。この地域は細い本もの谷筋にわかれているが、最も南の西宮市

山口町あたりから最北の三田市西相野あたりまでは約一六キロメートルであり、距離的にみても一集団領域と推定するにふさわしい。

以上のような集団領域は、三田盆地や明石川流域のように、地形的にみて一つのまとまりをもった地域についてはその成立事情は理解しやすいが、六甲山地南麓部のように東西にひろがるような地域では、他に成立要因を求めなければならない。

たとえば、縄文人の主要な狩猟対象であったイノシシは、直径約一〇キロメートル程度の山の稜線によって囲まれた範囲内に群居するといわれており、こうした狩猟対象動物の生息圏と人間の行動範囲が一致するのではないかと推定されている。

また、人間が狩猟・漁撈などの生産活動において一日に往復しうる範囲、あるいは物資の運搬・交易などにおいて一日に行動しうる範囲が、彼らの集団領域をおのずから形成しているともいわれている。

六甲山地南麓部における二つの集団の行動範囲は、他地域に比してやや狭いが、それぞれの範囲内に縄文海進期の大きな入江を含んでいる。海岸平野にあっては、こうした地形環境も一つの集団領域が成立するための要因となりえたと推定される。

そして、こうした環境が次の農耕社会への移行に際して重要な生産の場を提供することになり、おそらくは、海岸平野にあっては縄文時代のそれぞれの集団領域が母体となって、新たな稲作農耕を受け入れていったのではなからうか。